

南太平洋にイカを求めて -ニュージーランド漁場探査-

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-07-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高山, 剛
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010346

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



南太平洋にイカを求めて

－ニュージーランド漁場調査－

高山 剛（開発調査センター 底魚・頭足類開発調査グループ）

1. はじめに ーたぶん食べてるNZのイカー

ニュージーランドは、日本から南南東に約9000キロのところに位置します。ニュージーランド（NZ）といえば、畜産や観光が盛んなイメージですが、その周辺には世界有数のイカ漁場があることをご存じでしょうか。2004年にはNZ周辺海域で14万トンものイカが漁獲され、かなりの量が日本国内にも流通しています。NZのイカは、肉質が柔らかく、惣菜の原料として人気があり、イカめしやイカそうめんなどに加工されています。皆さんもしかししたら、NZのイカとは知らずに食べていることがあるかもしれません。

NZ沖合でのいか釣り漁業は、日本の漁船によって約40年前に始められました。最盛期には150隻あまりが出漁し、5万トン近く漁獲していましたが、1980年代以降、資源量がより大きい南大西洋の

漁場が開発されたことなどにより、NZ漁場から日本船は次々と撤退しました（図1）。

ところがここ数年、南大西洋への出漁がアルゼンチンの国内事情等により困難になってきたことや、ペルー沖で漁獲されるイカの魚価が下落したことにより、NZ周辺漁場の再開発の必要性が高まりました。このため、開発調査センターでは、2002年度よりNZ漁場の再評価を目的としたいか釣り調査を開始しました。ここでは、昨年行った操業試験の結果をもとに、NZいか釣り漁場の経済的評価を行います。

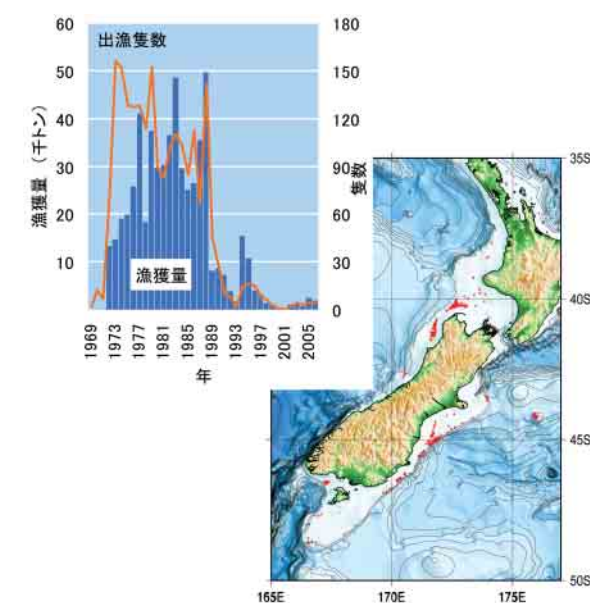


図1 我が国いか釣り漁船のNZ出漁隻数・漁獲量と調査海域
赤い点は2006ー07年調査の操業地点。

2. NZイカの正体は？ ー2種類いる？ 漁師は知っていたー

NZ周辺で漁業の対象となるイカは2種類います。一つは、オーストラリア沿岸とNZの西岸に分布するオーストラリアスルメイカ、もう一つは、南島周辺の広い範囲に分布するニュージーランドスルメイカです（図2）。これらが、別の種であることに決着が付いたのは、NZでいか釣り漁業が始まってから約20年後のことでした。両種は形態的によく似ていますが、漁獲直後の色がオーストラリアスルメイカでは白っぽく、ニュージーランドスルメイカでは赤っぽいことから、漁業者は早くから両種の違いに気づいていたそうです。

これら2種は、混ざって漁獲されることもあるため、別々に製品化されたり、流通の段階で区別されたりすることはありません。2006年度の調査では、オーストラリアスルメイカとニュージーランドスルメイカが重量比で約1:4の割合で漁獲

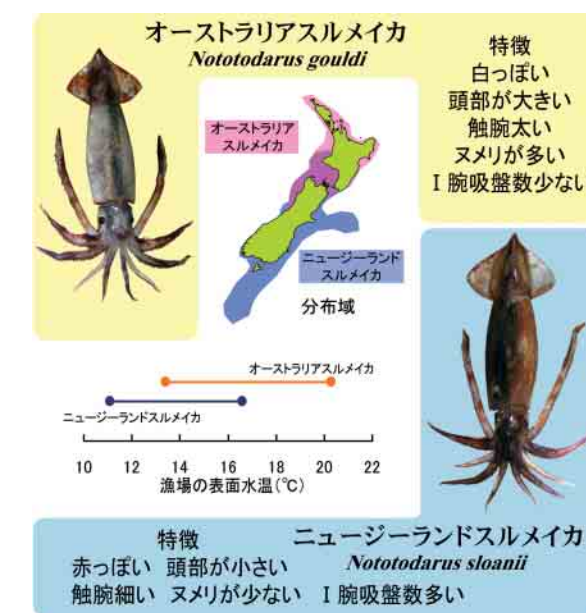


図2 NZ周辺で漁業の対象とされるスルメイカ類

されましたが、取り扱い上の実態をふまえ、ここでは両種の区別をせずに話を進めます。

3. 調査の結果 ー漁獲量750トン、水揚額1億4千万円ー

NZ周辺でのいか釣り調査は、2006年の12月3日から2007年の5月4日までの約5ヶ月間行いました。この間の操業1日あたりの漁獲量は6.04トンで、期間中合計749トンを生獲しました。主な漁場は、本島西側、カンタベリー湾、ベリヤンバンクに形成され、これら3漁場の漁獲量は全体の約9割に達しました（図3）。漁獲物は、ラウンド（丸のまま）またはつば抜き（内臓を除き、いわゆる「胴」と「足」の部分だけを製品とする）の状態に冷凍ブロックとし、718トンの製品に仕立て、全量を函館に水揚げしました。その結果、およそ1億4千4百万円（税込み、キロ単価201円）で販売することができました。

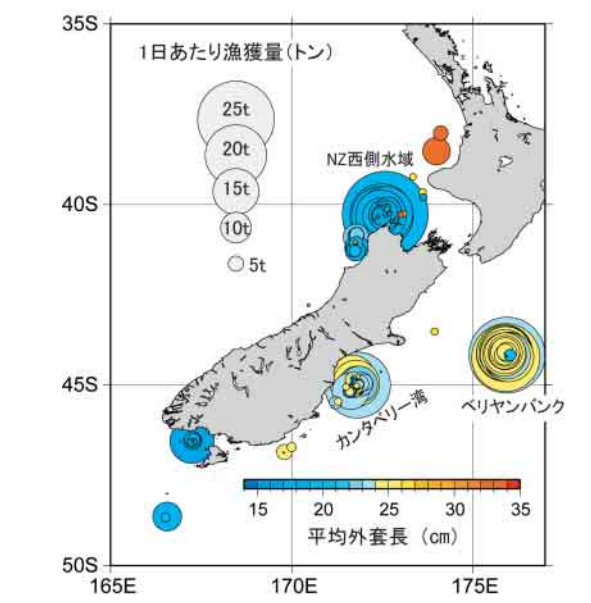


図3 操業1日あたり漁獲量の分布
円の大きさは漁獲量、色は漁獲物の平均外套長を表す。

4. 経済的評価 –NZイカ釣り皮算用–

本題に入る前に、いか釣り漁船の実態について少し説明します。日本のいか釣り漁船は、185トン以上の大型船、30～185トンの中型船、30トン未満の小型船の3つのカテゴリーに分けられています。大型・中型クラスの代表的な船型と、調査船との比較を図4に示しました。大型船と中型船では、釣機台数で2倍の差があります。このことは、同じ条件で操業した場合、大型船は中型船の2倍のイカを漁獲できることを意味します。また、冷凍ブロックの積載量で比較すると、大型船は中型船の5倍の能力を持っています。中型以上のクラスは、NZに出漁する能力を持っていますが、現在出漁しているのは大型船のみで、中型船はもっぱら日本の沖合で操業しています。2005年の統計（漁業経営調査報告2006：農林水産省統計局）では、年間漁業経費は大型船の場合3億9百万円、中型船では1億8百万円とされています。2005年と比べ、現在は燃料油価格が値上がりしているので、2007年における年間漁業経費は大型船で3億1千3百万円、中型船で1億9百万円程度となると考えられます。

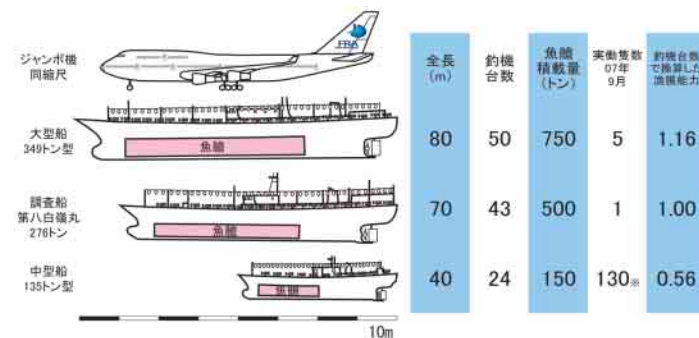


図4 各クラスのいか釣り漁船の規模
※中型船は30トン以上185トン未満の隻数。

この値が採算ラインの目安となりますが、NZへの出漁期間は長くて半年間程度なので、年間の漁業経費をそのまま用いることはできません。そこで、各タイプの年間稼働月数（大型船11ヶ月、中型船10ヶ月）で割った値を採算ラインとして用いました。1ヶ月あたりの採算ラインは、大型船で2千8百万円、中型船で1千百万円と試算されます。NZ操業の水揚金額を、日本を出発してから再び帰ってくるまでの期間で割り、上記以上の額が得られれば黒字の商売ができることになります。

では、どれくらいのイカを漁獲すれば、採算ラインが達成できるのでしょうか。

調査で得られたデータをもとに、日本を出発してから再び帰ってくるまでの出漁期間と、期間を通した1ヶ月あたり水揚金額の関係をいか釣り船のタイプ別に求め、図5の上のグラフに示し

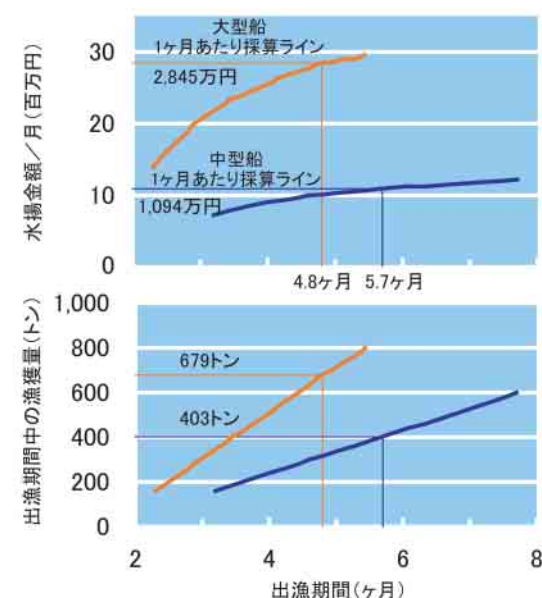


図5 NZ出漁期間と1ヶ月あたり水揚金額、及び漁獲量の関係

ました。この関係から、採算ラインを達成するためには、大型船で4.8ヶ月、中型船で約5.7ヶ月の出漁期間が必要であることがわかります。また、図5の下グラフは、出漁期間と期間中の漁獲量の関係を示しています。下のグラフの関係から、上記期間中の漁獲量は、大型船で約680トン、中型船で約400トンであることがわかります。この間、大型船は転載をしなくて済みますが、船の最大積載量の都合上、中型船は2回、250トンをコンテナに転載することになります（転載にかかる経費は水揚額から差し引いています）。

上記試算の漁獲量、及び操業期間は、漁船の能力、及び運航スケジュールに照らし合わせて十分に実現可能な範囲にあります。このことは、NZ周辺漁場は現在と同じ資源水準が続く限り、大型船のみならず中型船にとっても有用な漁場であることを示唆しています。

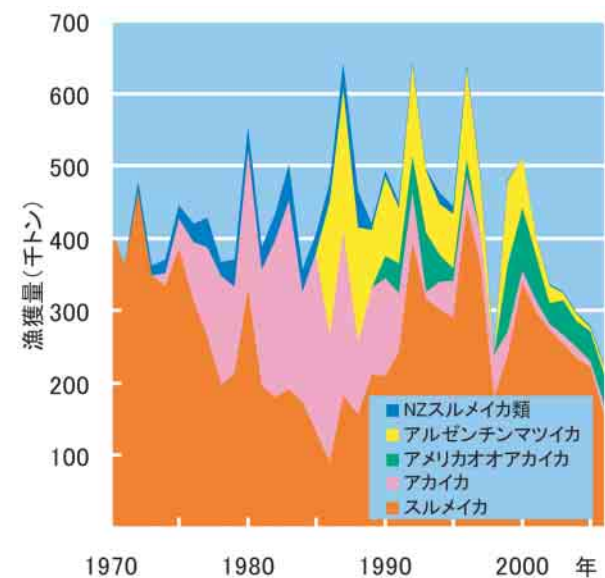


図6 イカ種類別漁獲量の推移

5. おわりに –NZはイカの安定供給に欠かせない漁場–

調査によって、NZ周辺水域が経済的に価値の高い漁場であることがわかりました。では、わざわざ遠くまで出かけてイカを獲ることに、どのような意義があるのでしょうか。

市場でのイカの人気は高く、毎年コンスタントに需要がある一方、資源量は激しく変動します。図6は、我が国におけるイカ類の種類別漁獲量の経年変化を示しています。国内の漁獲と消費の中心を占めるスルメイカの漁獲量は、1970年代はじめには40万トンを超えていましたが、80年代半ばには10万トン近くまで落ち込みました。その後回復し、90年代には再び40万トンを超えましたが、現在では20万トン程度で推移しています。80年代半ば、落ち込んだスルメイカの供給量をカバーしたのが、太平洋で漁獲されるアカイカや、NZ、南大西洋で漁獲されるスルメイカの仲間たちでした。

現在、海外でのいか釣りが次々と不振に陥っています。最盛期には150隻を超えた大型いか釣り船も、2007年9月現在わずか6隻まで減ってしまいました。このような状況下、もしスルメイカの資源水準が1980年代並まで低下した場合、不漁によって大幅な供給不足となり、漁業者のみならず関連産業にまで大きな影響が及ぶと心配されます。今回、中型船でもNZでの操業が可能であることを示しましたが、「もしも」の場合に利用できる漁場を確保しておくことは、食料の安定供給のために重要なことなのです。